

---

# 交換

\_瑠姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交換

### 【Nコード】

N9196Z

### 【作者名】

— 瑠姫

### 【あらすじ】

双子の姉妹、莉愛と愛莉。仲のよい姉妹だったのだが…？  
— 応ホラーだったりします。

## 序章

あるところに莉愛りあいと愛莉あいりというとても仲のよい双子の姉妹がいた。

しかし似すぎていて親でも区別がつかない。

困った親は莉愛にツインテール、愛莉にポニーテールで髪を結った。

「これで区別がつくわ」

大人は皆、一安心だった。

それから10年の歳月が過ぎ彼女たちは16歳になった。

「莉愛〜愛莉〜起きなさい!」

1日はまず母の怒鳴り声で始まる。

『はい』

それぞれ別のところから返事をしているはずなのに

同じタイミングで返事をする。

これが双子というもの。

2人は諦めつつあるようだ。

『おはよ〜』

同じタイミングでこれまたリビングに着たから

母も驚いた。

それに彼女たちはまだ髪を結ってなかった。

「おはよう。コッチが…莉愛？」

「はーずれ！私は愛莉よ！」

そついいながら彼女たちは洗面所に行き

莉愛は2つに、愛莉は1つに髪を束ねるのだった。

しかし莉愛は髪を結おうとしない。

「ねえ、愛莉。今日数学のミニテストあるのよね〜」

愛莉も手を止め返事をする。

「あ、莉愛！あたしも国語のスピーチがあるの」

ソックリな声で会話をする2人。

目をつむって聞いていると同一人物がしゃべっているようだ。

『交換しよ！！』

二人は同時に言ったことについてはあえて何も言わず髪を結うのを再開した。

ただし

莉愛はひとつに、愛莉はふたつに。

「おはよ〜」

彼女たちはこうして

莉愛は愛莉に、愛莉は莉愛になったのだった。

「きりっ」

【さよーならー】

学校が終わりガヤガヤと帰宅を初める生徒たち。

莉愛は得意科目の国語を愛莉の教室で完璧にこなし

愛莉は得意科目の数学のテストで100点を取った。

二人の少女はそれぞれ帰宅を始める。

ここから、ズレが始まった。

莉愛

最近暑くなってきたな

首に汗のせいでくっつく腰までのばしていた髪をかきあげる。

ポニーテールで首にくっつくから嫌よね。

愛莉は大変だ……

そうだ、愛莉を驚かせよう。

シュッとポニーテールをほどこき

私は家の帰る道を引き返し

ある店に急いだ。

愛莉

シャキン、最後の音が聞こえた。

「終わりましたよ」

店員が声をかけてくれる。

「これでいいですかあ？」

「ありがとうございます」

会計をすまし私は店を出た。

そこから私は借りたいCDがあったことを思い出し  
店を出た向かいにあるビデオ屋に入った。



ズレ

莉愛

『じゃ〜んっ！』

帰宅してただいまも言わずにリビングのドアを開ける。

帰ってくる途中に切ってきた髪の毛を披露するためだ。

愛莉は驚くだろうな。

なんてたつて腰まであった長い髪を肩まで切ったんだから。

「おかえり莉愛……え!?!」

ふふ、やっぱり驚いている……!

そういつてダイニングテーブルのところに行った愛莉をみる。

「…えええ！！？」

愛莉の髪の毛は腰までのポニーテール。

…のはずなのだが。

肩までバツサリと短くなっていた。

「なんで莉愛も切ってるの！？」

「愛莉こそ！…驚かせようと思って切ったのに…」

「莉愛も！？私ものにな…」

「え〜スゴイ偶然だね！どこの店で切ったの！？私は…」

『 整髪店！！』

私と愛莉は声をそろえて小さい頃から連れて行ってもらっている  
パーマ屋さんの名前を出した。

「さすが双子ねえ」

キッチンからお母さんのため息混じりの声が聞こえてくる。

そつだ、髪を結べなくなっただから

区別もつかなくなる…

そう思っていたとき愛莉がこっそり私に耳打ちした。

「これからは髪型かえなくても交換できるね」

お母さんには悪いけど

全くその通りだと思った。

愛莉

ビックリした…

莉愛もまさか髪を切ってるとは…

しかも同じ店で!!

あり得ないわ

いくら双子だからってさ

ん？

でも...

どうなんじゃあ...

莉愛に「っそり言った。

「これからは髪型かえなくても交換できるね」

莉愛はコクツと小さく笑顔で頷いた。

さっきの撤回！

双子って便利だわ

男

愛莉と莉愛は髪を切ってから

ちよくちよく交換をするようになった。

しかしそれに気づく者など誰も居なかった。

髪型も背も性格も顔も。

全部一緒。

親でさえ区別がつかなくなっていた。

そんななか、事件は始まるうとしていた。

莉愛

「愛莉…ちょっといい？」

私は今、愛莉として愛莉の教室で愛莉の友達としゃべっていた。

そんななか一人の男に声をかけられた。

誰だコイツ…

そう思い名札をみる。

《浦山達也》  
うらやまたつや

聞いたことあるような…ないような？

でもソイツは私のことを愛莉だと思っているようだった。

なのでなんの警戒もせずに

彼の言うまま着いていった。

ズンズンと私の先を歩く彼。

ピタリと止まったその場所は

屋上へと続く階段の踊り場。

なんでこんなところに？

「どうしたの？こんなばしょで…」

愛莉がコイツと親しいか親しくないかなんてわかんないし

愛莉がコイツを何と呼んでるかなんて知らないから

とりあえずそれだけ聞いてみた。

背中を向けていた彼はクルリと振り返り

口を開いた。

「今度……」

今度？

「今度、俺と一緒に映画行かない？」

顔を背ける達也と呼ばれる人物。

ア――――

思い出した！

コイツ、学年一のモテ男クンだ——！！

「ん…ん」

愛莉らしく、愛莉らしく

心の中でずっと唱えていると

冷静になれた。

「デートってことかな？」

笑顔を作って聞く。

コクリと頷く達也。

その笑顔が引きつる。

始業のチャイムが鳴る。

「とりあえず…返事は後でいいよ…」

小さい声で言って教室に戻り始める達也。

私も階段を下り始める。

なんでなんで

達也は愛莉が好きなの？

学年一モテる達也が！？

愛莉もモテるの！？

意味わかんない

けど

わかる

誘われたのは愛莉だけど

それを知ってるのは私だけ。

とりあえず私は愛莉として

授業を受けるため教室に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9196z/>

---

交換

2011年12月29日14時55分発行